

本の万華鏡

『ラッキーをつかみ取る技術』

推薦者
小島 貴子
(こじま たかこ)

立教大学大学院ビジネスデザイン研究科准教授、コア教育・コーディネーター、キャリアカウンセラー。1958年生まれ。三菱銀行(当時)の一般職から専業主婦を経て、91年に埼玉県庁に職業訓練指導員として入庁。キャリアアカウンセリングを学んだ後、05年3月に県庁を退職し、同年5月から立教大学で社会と大学を結びつける「コア・コーディネーター」に就任し現職。主な著書は、『働く意味(幻冬舎新書)』、『働く女の転職予報(幻冬舎)』、『就職迷子の若者たち(集英社新書)』など。

小杉俊哉著 —— 光文社新書 二〇〇五年

著書のタイトルと中身がこんなにも心地よく一緒であり、一文一文に膝を打ちたくなる本に出会えたことが、私には「ラッキー」だと感じられた一冊であった。

著者は、自分自身の体験と理論との重ねにとどまらず、ラッキーを起こす、起こすために必要不可欠な「見えること」の難しい精神的な自律」を丁寧にエピソードと共に語ってくれている。

また、この本に共感できる重要なことは、綺麗ごとだけでなく、著者の実父の失敗や、著者自身の挫折も正直に語られていることであろう。

敢えて、経歴や学歴では輝かしい著者が、赤裸々に出自を書くことができることが、一番の自律の証であると私は感じた。

彼は言う、

「誰かが決めた基準に自分自身を合わせようとするキャリアを『相対的キャリア』と呼んでいます。これに対して、私が必要だと思うのが『絶対的キャリア』です。自分が何をしたいか、自分ならどう判断するかという基準を明確にし、それに沿って仕事をすること。キャリアも評価も自分で作り出すということですよ。」

「自立」ではなく「自律」です。「自立」は自分の力で生活する、一人前になるということです。当たり前のことですね。「自律」は自分で選んだことに責任を持つということ。自分で選んでいるという意識があるからこそ、コミットメントが生まれます」

そして、この本のヒロインは、著者の96歳になる祖母ではないだろうか？ 51歳で運転免許を取り、現在も一人で旅行に行ける！行っているエピソードの数々。好奇心に蓋をしない。アクティブな生き方をしている女性を著者は「我が祖母ながら憧れる」と言い切っている。

是非、ご一読をお勧めしたい。



from editor's room

- 『職務満足感と生活満足感』小野公一 白桃書房(1993年)
- 『生活経済学入門』原司郎、酒井泰弘 東洋経済新報社(1997年)
- 『われら中高年、職業訓練校で再就職に成功せり—リストラ、倒産の嵐のなか、23人の再出発の記録』小野公一 二見書房(1999年)
- 『日本の消費者教育—その生成と発展』西村隆男 有斐閣(1999年)
- 『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』田村太郎 明石書店(2000年)
- 『生活経済論』馬場紀子、御船美智子、宮本みち子 有斐閣(2002年)
- 『北欧の消費者教育—「共生」の思想を育む学校でのアプローチ』北欧閣僚評議会議編、大原明美訳 新評論(2003年)
- 『市民力』上野征洋編 宣伝会議(2005年)
- 『消費生活思想の展開』日本消費者教育学会 税務経理協会(2005年)
- 『アメリカ型不安社会でいいのか—格差・年金・失業・少子化問題への処方せん』橋本俊昭 朝日新聞社(2006年)
- 『就職迷子の若者たち』小島貴子 集英社(2006年)
- 『リスクのモノサシ—安全・安心生活はありうるか』中谷内一也 NHKブックス(2006年)
- 『リスク社会を見る目』酒井泰弘 岩波書店(2006年)
- 『家計研究へのアプローチ—家計調査の理論と方法』御船美智子、家計経済研究所 ミネルヴァ書房(2007年)
- 『家族の経済学—お金と絆のせめぎあい』橋本俊昭、木村匡子 エヌティティ出版(2008年)
- 『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠 岩波新書(2008年)
- 『よくわかる生活設計読本—将来の家計をシミュレートする』よくわかる生活設計読本編集委員会 中央法規出版(2008年)
- 『安全。でも、安心できない—信頼をめぐる心理学』中谷内一也 ちくま新書(2008年)
- 『生活の経営と経済』柿野成美他 家政教育出版社(2008年)
- 『いま、働くということ』大庭健 筑摩書房(2008年)
- 『キャリアをつくる9つの習慣』高橋俊介 プレジデント社(2008年)
- 『大人のいない国—成熟社会の未熟なあなた』鷲田清一、内田樹 プレジデント社(2008年)
- 『生活者が学ぶ経済と社会』萩原清子編著 昭和堂(2009年)